東南アジアの農村景観

斎藤　功

モスクワで国際地理学会が開催されている頃，私は東南アジアの農村にいた。スリランカの大農園と焼畑農業をみたいという最初の目的がコロンボにおける非同盟諸国会議のため入国不可能となり，行先を東南アジアに変えたためである。7月下旬から8月中旬までの短期間であったが，シンガポール，マレーシア，タイ，香港，台湾で思った以上の見聞がえられたのは，南洋大学・台湾師範大学をはじめとする現地の方々の好意と熱帯研究に造詣の深い山本正三教授に同行したお陰である。

東南アジアで日本につぐ国民所得をあげているシンガポールでは，スラム・クリアランスによる都心の再開発，ジュロン工業地区，多くのニュー・タウンをみることができた。住宅事情は間取り，家賃の点で日本よりも進んでいる。農業は急速な都市化に追われ，わずかに残っているのみである。つまり，中国系農民による集約的野菜園，花卉園および畜産経営とマレーシア系農民による粗放的やし栽培およびゴム園の荒地化が対照的であった。また，セレター湖の水源涵養林で多様な樹層からなる熱帯雨林の一部をみることができた。

シンガポールからマレーシアへはタクシーで渡り，3日間アメリカ人教師夫妻と旅をした。マラッカ附近で水田とココナツ栽培がみられたが，ジョホールバルからクアラルンプールまで道路の両側は殆んどゴム園であった。ゴム園は一定面積ずつ小農（小作農）に分割されている模様で，私達が訪れた農園では小農夫婦が1 ha 前後のゴム園から樹液の採収・ラテックスの製造を行なっていた。ゴムの木は白樺に類似し，整然と植付けられていなかったらわが国の落葉樹林帯の林道と変らない光景であった。クアラルンプールからペナンまでの間錫鉱山をみた。砂地で流下式水選鉱を行う装置と青緑色プールのある簡単な鉱山であったが，空から看ると自然破壊の裸地の広さにおどろかされた。マレーシアでは同じコースを陸上と空から観察することができ，これが意外と効果的であることをしった。シンガポールとマレーシアの都市は清潔で美しく，イギリスの植民地支配の遺制というより遺産を強く感じさせた。

東洋の水の都バンコク市内では，野菜・果実・魚の露店市場をみてまわった。バナナやパパイヤと比べものにならないランブータン，マンゴスチンはどこのマーケットでも賞味した。メナム（チャオプラヤ）川は経済の動脈で貨車のような連結船，バスや自動車の役割をしている船の往来が激しい。また，隅田川のように汚染された運河で顔を洗っている人々や水泳している子供の様子は水に対するタイ人と日本人との感受性の差をみせられた。バンコク郊外では精米所を核とした農村集落，米作風景，家鴨農家等をタクシーでみてまわった。バンコク近郊ではチェンマイよりも耕耘機が普及していた。もっとも水牛による耕起，代かきが支配的であった。海岸近くでは風車灌漑，塩田をみることができた。タイ中部の田切地形の丘陵地では焼畑・炭焼が盛んに行なわれており，この丘陵地から肉牛を20～30頭つれた牧畜民が水田地帯に移牧を行なっているように思われた。城下町を思わせるチェンマイ周辺の農村は垣内集落になっており，垣外で刈り跡放牧が行なわれていた。タイ中部は私にとって最も魅力を感じさせる所であった。

（1977. 10. 1）